

国語科

育成したい「思考力」

- a 論理的思考力：ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，既成の秩序の中で吟味する力
- b 想像力：ことばとそれが指し示す意味，ことばとことばの関係，ことばとその使用者について，五感を通して得てきた知識や経験と結んで自分の考えを創造する力
- c 言語感覚：ことばの使い方の正誤，適否，美醜等について，直感的・感覚的に捉える力

a 「論理的思考力」とは

○ ことばとそれが指し示す意味において

そのことばの整合性を吟味することである。例えば『もうどう犬の訓練』（東京書籍、『新しい国語』三下）では、『「いっしょに町を歩く練習をします。』と，1か所だけ『練習』ということばが使われているが，これは訓練ではないのか。「練習ということばには，訓練とは違った意味があるのか。」と，ことばのもつ意味の範囲と照らし合わせながら，ことばとそれが指し示す意味の整合性について吟味する思考である。

○ ことばとことばの関係において

順序や主張と根拠の整合性等，叙述相互の整合性について吟味することである。形式論理（帰納論理，演繹論理）は，この思考に含まれる。例えば，自分の意見を述べる際，「根拠として何を挙げればよいか」「事例としてふさわしいものは何か」と，話す内容を吟味するのがこの思考である。

○ ことばとその使用者において

そのことばの使用者の意図を捉え，その整合性について吟味することである。『森林のおくりもの』（東京書籍、『新しい国語』五下）には，木が長生きであることを述べている部分がある。その部分について，「筆者が，読み手のよく知っている例を挙げているのは，読み手の納得を得ようとしているからだ。」等，筆者の意図について吟味することがこの思考である。

次に載せるのは，「論理的思考力」（ことばとことばの関係を吟味する力）の例である。

第3学年「2年生に自然のかくし絵クイズをしよう - 『自然のかくし絵』 -」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

目的に応じて各段落の中心文を捉える中で，文と文の関係を見いだす力

中心文は，読み手の目的に応じて変化する。本実践では，2年生に『しぜんのかくし絵』に関して写真を用いたクイズを出題し，答えに各自が適切な解説を添えるという目的に応じて，各段落の中心文を捉えていく。その際，同一の写真でも「形」に着目した場合と「色」に着目した場合には，結び付く文は異なってくる。子どもたちは，各自，着目した観点に沿って写真と本文を結び付けながら，段落内にある複数の文の中から，2年生へのクイズの解説としてよりふさわしい文を見つけしていく。このようにして，段落内の文と文の関係を吟味していくのである。

b 「想像力」とは

○ ことばとそれが指し示す意味において

一語・一文を知識や経験とつなぎながら自分の読みを創造することである。『かさこじぞう』（東京書籍、『新しい国語』二下）に「じいさまは，ぬれて つめたい じぞうさまの かたやら せなやらを なでました。」という叙述がある。その一文から「じぞうさまは石でできているから，さわると，きっと氷のように冷たいよ。」「ぼくは，『じぞうさま，こんなにつめたくなってつらからうにのう。』と，じいさまがじぞうさまを思う気持ちを考えたよ。」等と，様子や気持ちを思い描くのがこの思考である。

○ ことばとことばの関係において

類似していることばや対比的なことばの関係を讀んだり、文脈とことばの関係を捉えたりしながら、自分の考えを創造することである。『注文の多い料理店』（東京書籍、『新しい国語』五下）には、「金文字→黄色な字→赤い字」のように色が象徴的に用いられている。これらを比較してその意味を生み出したり、紳士の心情の変化と重ねて捉えたりするのがこの思考である。

○ ことばとその使用者において

叙述を根拠に書き手・話し手の意図等をつかみ、自分の考えをつくり上げていくことである。物語の主題を捉えたり、説明文における筆者の主張を讀み取った上で、関連する本や文章から得た知識と結んだり、自分の経験と関わらせたりしながら、自分の考えをつくり上げていく際に働くのがこの思考である。

次に載せるのは、「想像力」（ことばとその使用者において自分の考えを創造する力）の例である。

第5学年「新聞記事が伝えること」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

見出しや写真、本文を手がかりに、新聞記事の書き手のメッセージを捉える力

新聞記事に採用される写真は、毎日7,000枚ほど新聞社に送られてくるものの中から選ばれたものである。見出しはその記事の中心を短い言葉で表したものである。本文は、その記事を詳細に表し、出来事の全体像を伝える。このように「見出し」「写真」「本文」ともに書き手のメッセージが込められている。

本実践では、新聞記事を読み、「見出し」「写真」「本文」の三つに共通のメッセージを見つける。そうすることで、記事の根底に流れる書き手のメッセージを一層強く捉えられるようになるのである。ここで働くのが「ことばとその使用者において自分の考えを創造する力」である。

c 「言語感覚」とは

○ 正誤

語の使い方や文の組み立て方について、言語規範に合っているか否かを直感的に判断・評価する能力。

○ 適否

物事を適切に言い表しているか、場や相手にふさわしい表現か等、表現の妥当性や効果を直感的に判断・評価する能力。

○ 美醜等

美しい・汚い、明るい・暗い、固い・柔らかい、重い・軽い等、あるいは軽快、重厚、優美、勇壮等、表現の微妙なニュアンスを直感的に判断・評価したり感覚的に味わったりする能力。

「言語感覚」（美醜等）に関わる「思考力」の例としては、次の実践が挙げられる。

第6学年「子ども句会を開こう」の実践例より

【本単元で育成したい「思考力」】

俳句作りにおいて、ことばを別の表現に変えたり、ことばの順序を入れ替えたりすることによって生じるニュアンスの違いを直感的に感じ取る力

俳句では、その短さゆえに、一つのことばの役割は大きい。また、ことばの順序も句のイメージ形成上、重要である。本単元では、そのような俳句の性格を生かし、句中のことばを類似することばに入れ替えたり、順序を入れ替えたりすることで生じるニュアンスの違いを感じ取っていく。

例えば、「手紙書くいっしょにとどけ虫の声」と「手紙書くいっしょに入れたい虫の声」とを比較して両者の語感の違いを感じ取ったり、「百びきが同じ向き飛ぶ赤とんぼ」と「赤とんぼ飛ぶ百びきが同じ向き」のようにことばの順序による句のイメージの違いを感じ取ったりする力が、「美醜等を捉える言語感覚」である。（掲載句は、「東京書籍、『新しい国語』六下、23頁」より引用）